

## 歓迎のご挨拶

先ずは、皆様を名古屋にお迎えできましたこと欣喜雀躍の思いです。また会員各位には、本学術講演会開催に向け多大なる御支援を賜りましたことを心より御礼申し上げます。

本会の歴史を紐解きますと、記念すべき第1回講演会は当地名古屋において可世木辰夫先生が主催されたことに始まります。その20年後の第33回学術集会は、故河上征治教授のもとで我々の大学が主幹校（当時の事務局長は吉村泰典 講師、現日本産科婦人科内視鏡学会理事長）としてお世話をさせて戴きました。それからまた丁度20年後となる節目の年に第53回学術講演会を主催させて戴くこととなり、身に余る光栄として無類の喜びを感じております。

さて、本邦では1980年からの約10年間は診断を主体とした腹腔鏡が行われ、1990年前後には先進的な施設でpreliminaryな腹腔鏡手術が開始されました。その後、腹腔鏡手術は多くの先生方の刻苦勉励により開腹手術、腔式手術にならぶ第3の術式として確固たる地位を確立しました。更には、日本の婦人科 Endoscopic surgeonsは、この20数年間の症例集積により欧米に勝るとも劣らない先進的かつ高度の鏡視下操作を習得しており、新しい領域（悪性疾患への応用）への機はまさに熟したものと確信しております。そこで、本学術講演会では、「Endoscopic surgeonsの矜持－我々は何処まで来たか!? そして何処へ向かうのか?」をテーマに掲げ、“暑い名古屋”で、多くの先生方の“熱いディスカッション”を期待したいと思います。また今年は新しい試みとして演題の公募制（一部指定）を採用、さらに要望演題を指定して登録を募りました。その結果、教育講演1、特別講演2、シンポジウム 2、ワークショップ 3、パネルディスカッション8演題を含む535題のプログラム集を上梓することが出来ました。紙面をお借りして会員各位の御協力に厚く御礼申し上げます。

私自身はと申しますと、川崎市立川崎病院の岩田嘉行先生に腹腔鏡を師事し34年になりますが、現在も外来診療日以外は内視鏡手術三昧で、齢60になりさらに手術の深邃を痛感しております。具体的には、TANKO手術の導入により鉗子操作の玄妙と組織を過伸展させない「真に力を抜いた」優しい操作を、そしてロボット支援手術では対象臓器により近接した繊細な鏡視下操作の蘊奥を時習しました。これら内視鏡操作の新たな発見を契機として、私の内視鏡手術に対する憧憬は益々強まるばかりであり、この内視鏡手術のすばらしさを若い先生方に喧伝する一方で、彼らには内視鏡手術に対する自彊不息の気概を堅持することを切望する次第です。最後に、次世代を担う多くのEndoscopic surgeonsの輩出を冀望し挨拶の言葉にしたいと思います。

平成25年 8月吉日

第53回 日本産科婦人科内視鏡学会  
会長 廣田 穰  
(藤田保健衛生大学 産婦人科)

